受賞記念講演：「アジアに生きる日本」

大賞 ／ 福田 康夫(元日本国内閣総理大臣)

近代日本はアジアか欧米かと問われることがあるが、維新以後特に、欧州から近代技術や法制度などを導入し、戦後はアメリカから技術のみならず、その文明まで取り入れて来た上に、安全保障の面で全面的に依存してきたことから、日本は西洋諸国に近く、特に米国とは一体と思われることが多い。

しかし、日本民族の起源や由来を始めとして古来、制度、宗教、風習など文明に係わる多くは、アジア大陸に依拠している。

最近の精度の向上したDNA研究によれば、現在の日本民族の大半は弥生人で、その多くは朝鮮半島を経由した渡来人であることが判明している。

一例を挙げれば、一昨年、ユネスコの記憶遺産として登録された上野三碑（群馬県）は、西暦680年から720年の間に建立された3基の石碑だ。そこに記されている内容は、中国を起源とする政治制度、漢字文化やインドを起源とする仏教のことなど朝鮮半島を経由した渡来人によりもたらされたものだった。それをもたらした渡来人と文明は、その地区に受け入れられ、アジアの人びとが融和してきた証拠とも云える。

日本は、歴史上、アジアとの関係が無い時代は無かった。ただし、近代における一時期、日本は間違えた方向を目指して失敗した。その経験と反省から、以後新たな方向を目指し、アジアとの距離を縮める努力を重ねてきた。今や、アジアの国々を日本は友人と思っている。また、時々言い争う事もある中国、韓国にしても、互いにその重要性を良く認識し、国民同士の相互理解も進み、友好的な関係は増進しているので、中長期的にも問題はないと考える。

発展の著しい中国、韓国については云うを待たないが、東南アジア、分けてもアセアン地域の順調な発展は特筆に価する。一昨年50周年を迎えたアセアン10カ国は、それぞれ民族、言語、歴史、宗教、文化、伝統などの違いを乗り越えて団結・協調し、この地域の発展の原動力となっている。

経済の安定成長に欠かせない要因は、平和であることだ。アセアンの比較的緩やかな仕組みを支える「寛容の精神」が、この地域に平和と成長をもたらしているのだろう。このアセアンの精神は、9世紀から6世紀という長い期間にわたり平和を維持したアンコール王朝の伝統を引き継いでいるのではなかろうか。

アンコール王朝の英明なジャヤバルマン7世の考えは、他者の幸せを尊重しながら他の部族を自分の家族のように取り込んで行くという寛容の精神である。その基本は、自己を抑制することで他者との争いを避けるアジア文明の特色である。

日本が約40年前に、「心と心の繋がる対等なパートナー」という理念（福田ドクトリン）を発表して、直ちに実行に移したその方針は、ジャヤバルマン7世の精神と共通し、創設10周年を迎えたERIAは、その具現への努力である。この考えは、過去だけのことでなく、永遠の未来に通ずる思想である。

経済のグローバル化が進展するにつれ、途上国の経済発展が進み、国民が貧困から解放される現実を見れば、この流れを止める理由は今のところ見当たらない。むしろ我々は自由の枠組みの拡大と進化に向け、さらに努力する必要を感じる。

順調に発展するアジア経済の世界における比重は増々大きくなるだろう。アセアンに日中韓の東アジアを加えた経済規模は世界全体の30パーセントを占めるが、これにインドを加えると10年後の2030年には40パーセント近くをアジアが占めることになる。それに応じて、当然のことながら、アジアの国際社会における責任は格段に大きくなることを、私たちアジアの国々は銘記しなければならない。

私はかつて世界は「太平洋の時代」になると主張したことがあるが、これはアジアを中心としてアメリカ大陸から東アジアまでの広い範囲の経済圏が生まれることを意味する。

いずれは、アジアは世界経済の中心となろうが、それに至るまでの道程において、世界の自由経済の仕組み、諸ルールなど、国際社会の中心に位置するアメリカの存在を欠かすことはできない。